# 生きるための道具

鍛冶屋師弟の作るもの

# 生きるための道具

**芳流（kaoru）**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18063397**

ダイの大冒険, ヒュンケル, ロン・ベルク, ノヴァ, ヒュンマ, ノヴァ(ダイの大冒険)

最終回から１０年後くらいの世界。
ヒュンマ前提で、ヒュンケルがマァムと一緒にネイル村に住んでいて、家庭を持っている前提なので、このシリーズに入れましたが、この話のメインは鍛冶屋師弟です。
鍛冶屋師弟、初書きです💧イメージに合わなかったら申し訳ないです・・・。

もとは、カヅキさんとの「爪切り」の話題がスタートで、カヅキさんが、ノヴァが子ども用の爪切りをヒュンケルに作ってくれる話を書かれたので、そのロン・ベルクversionです。カヅキさんとお話させていただいたときに、ごく短いロンとヒュンケルの会話を書いたのですが、それを膨らませた格好になります。
カヅキさんの爪切りのお話は、こちらからどうぞ。→爪切り
illust/99097102

実際に、現代でも刀鍛冶の方々は、爪切りとかも作っておられ、我が家にもそういう爪切りがあります。
そんな現代鍛冶屋のイメージも加えて書いてみました。

表紙はＡＣフォト様でお借りしました。

# 生きるための道具

　ドン、と乱暴にグラスを叩きつける音が響いた。
　それと同時に、その部屋の中に怒りの気配が充満した。
　師の苛立ちを感じ取ったノヴァは、肩をすくめた。
　いや、この場に誰がいても、そのびりびりと殺気立った気配は感じ取れただろう。わからない方がどうかしているというくらいのはっきりとした怒りを醸し出し、魔族の男は、目の前の来客をにらみ据えた。
　だが、ロン・ベルクとテーブルをはさんで相対しているヒュンケルは、眉一つ動かさなかった。
　ロン・ベルクのグラスを握ったままの手がわなわなと震えており、それが、みなぎる彼の怒りを現わしていた。
　ロン・ベルクは、低い声で、ヒュンケルを詰問した。
「・・・もう一度聞く。
　お前は何のために俺のところに来た。」
　だが、ヒュンケルは、なおも表情を変えることなく答えた。
「さっきも言っただろう。
　爪切りを作ってほしい。」
　聞こえなかったのか、と言わんばかりの当然のことのような返しに、ロン・ベルクは、必死でいらだちを抑えながら、さらに問い質した。
「・・・何のために。」
　するとまたもや、こともなげに、ヒュンケルは答えた。
「子どもの爪を切りたいんだ。
　貴方の腕も、だいぶ癒えたと聞いている。
　ひとつ、作ってもらえないだろうか。」
　ここに来て、ロン・ベルクの我慢が限界に達した。
　ロン・ベルクはグラスを握る手に力を込めた。
　パリンと、甲高い音を立てて、グラスが砕けた。
　テーブルの上で砕け散ったガラスの破片を目に、ノヴァは、師の握力は戻っているなと感じ、片付けが大変だなとこの先の己の労務

を思った。
　ロン・ベルクの怒声が、狭い作業小屋に響き渡った。
「ふざけるな！！
　俺を何だと思っている！
　俺は武器職人だ！
　そんなものが作れるか！！
　出ていけっ！」

　ノヴァは、彼らの住まう鍛冶小屋の窓から外を眺めた。
　見ると、そこには、つい先ほど小屋を追い出されたばかりのヒュンケルが佇んでいた。
　ガラスの破片を片付け終わったノヴァは、窓の外を眺めながら、振り返らずに師に尋ねた。
「ヒュンケルさん、待っていますよ。
　放っておいていいんですか、先生。」
「知るか！！」
「話くらい聞いてあげたらどうですか？」
「これ以上聞く話があるか！
　この俺に、爪切りを作れだと・・・？
　馬鹿にしているのか！」
「そういう人じゃないでしょう、ヒュンケルさんは・・・。」
　ノヴァはやれやれとため息を吐いた。
「先生は、納得した仕事じゃないと受けませんからね・・・。」
「当たり前だ。」
　ロン・ベルクのプライドは高い。納得しない仕事はしないことで定評がある。
　だが、やると決断した時の彼の仕事は超一流だ。
　次第に腕も癒えてきたいま、ロン・ベルクは、ノヴァの手を借りながら、細々と、製作の依頼を引き受けていた。
　もっとも、超一流の武器職人であるロン・ベルクに依頼する作品となれば、武器に決まっていた。
　それも、一流の騎士や武人からの依頼でなければ、ロン・ベルクは引き受けなかった。依頼主が何度も彼のもとに通って、やっと、

依頼を受けてもらえるかどうか。
　それは、ロン・ベルクの指導を受けてノヴァが作る場合も同じだった。
　その彼に、堂々と「子ども用の爪切り」の製作をヒュンケルが依頼に来たのだ。
　ノヴァは、ロン・ベルクに声を掛けた。
「でも、ヒュンケルさん、ちゃんと自分で依頼しに来ましたよ。
　先生は、常々、依頼主の顔を見なければ決めないって仰っていたじゃないですか。」
「それも武器の話だ。」
「・・・それで、どうするんです、ヒュンケルさん。
　以前、先生の魔剣や魔槍を十分に生かしてくれた人じゃないですか。」
「知らん！！」
　完全にへそを曲げてしまった師に、ノヴァはため息を吐いた。
　こうなってしまったら、ロン・ベルクはてこでも動かないことをノヴァはよく知っていた。
　だが、これでは、ヒュンケルが気の毒だ。
　ノヴァは、一計を案じた。
「ところで、先生。」
　ノヴァは口調を変えて、師に語り掛けた。
「何だ。」
「お話していませんでしたが、この前、父さんが、リンガイアのカルヴァドスを送ってくれたんです。８年熟成の上質のものだそうですよ。」
　その言葉に、ロン・ベルクは身を乗り出した。
「何だと？
　ノヴァ、お前、何でそれを言わなかった。」
　カルヴァドスは、林檎で作ったブランデーだ。林檎の産地であるリンガイアならではの名酒であるのだが、いかんせん、アルコール度数が高い。低いものでも、４０パーセントはあるのだ。
　非難めいたロン・ベルクの視線が弟子に注がれる。だが、ノヴァは、当然のことのように言葉をつづけた。

「だって、カルヴァドスは度数が強いじゃないですか。
　先生にそのままお渡ししたら、お身体に悪いですし。
　僕は、あの度数の酒は受け付けませんし。
　誰かが遊びに来た時にお出ししようと思って、取っておいたんですよ。」
　そして、ノヴァは、師に向かって笑顔で語り掛けた。
「ヒュンケルさん、お酒強いですよね？」
　ロン・ベルクは憮然とした面のまま、顔をそむけた。
　そして、少しの間、口を閉ざしていた。
　だが、しばらくすると、苦々し気に口を開いた。
「・・・入れてやれ。」
「はい。」
　ノヴァは、笑顔で師の指示に応じた。

　氷をぎっしりと詰め込んだ小さなショットグラスに、飴色の液体がゆらりと揺れた。
　芳醇な香りとつんとするアルコールの匂いが鼻腔をつく。
　ロン・ベルクは、ノヴァの注いだカルヴァドスのグラスを口元に運んだ。喉をとおる、焼けるような、それでいて甘みのある味わいが堪らない。豊かな香りが鼻に上った。
　ロン・ベルクの向かいでは、同じくカルヴァドスのグラスをノヴァから受け取ったヒュンケルが、グラスを口に運んでいた。
　上質のカルヴァドスにすっかりと色をよくしたロン・ベルクであったが、それでも、若干不満げな声色でヒュンケルに向かってつぶやいた。
「お前がいなければ、ノヴァがこいつを開けないと言ったんだ。仕方がない。」
　ぶつぶつと文句を言う師にかまわず、ノヴァはヒュンケルに声を掛けた。
「ヒュンケルさんは、カルヴァドスは飲んだことありますか？」
「ああ。リンガイアにいたときにな。」
「強いお酒でしょう？大丈夫でしたか。」
「甘さが気になってな・・・それほどたくさん飲んだことはない

が。
　冬場に身体を温めるのにはよかったな。」
「ああ、そうですね。」
　自分をよそに旧交を温めあう弟子と客に、ロン・ベルクはいっそう不満げな視線を送った。
「改めて聞くが、お前は何のために俺のところに来た。」
　すると、ヒュンケルは、改まった様子で、ロン・ベルクに向き直った。
「先ほども言ったが、爪切りを作っていただきたい。」
　またもや飛び出した「爪切り」の語に、ロン・ベルクは少々うんざりしながら、尋ね返した。
　カルヴァドスの味わいで、多少、彼の気分は、滑らかになっていた。一応、会話にはなっていた。
「・・・何に使うんだ。」
「子どもの爪を切るんだ。」
　ヒュンケルの即答に、ロン・ベルクは大きくため息を吐いた。くだらないことのように思えたからだ。
「・・・お前は、そんなもののために、わざわざキメラのつばさを使ってまで、ロモスからランカークスまで来たのか？」
　すると、ヒュンケルは、軽く笑みを浮かべて答えた。
「俺にとっては重要なことだったからな。」
「重要だと？」
　ヒュンケルはうなずいた。
「ああ。
　今までは、子どもの爪はマァムが切ってくれていたんだが、もうすぐ下の子も生まれるしな。そうすると、上ふたりの面倒は俺が見る必要がある。
　それで、俺でも使えるような、切れ味のいい爪切りが欲しいと思ったんだ。
　今までマァムが使っていたのは、古くなって切れ味が悪くなってきたからな。」
　そこでふと、ノヴァが合いの手を入れた。
「あれ、ヒュンケルさんのところ、お子さんふたりでしたっけ。」

「いまはな。
　もうすぐ３人目が生まれる。」
「それは、おめでとうございます。」
「ありがとう。
　今は家では飲んでない。
　酒を飲むのも久しぶりだ。」
「３人目ですか。早いものですね。
　でも、あの戦いからもう１０年以上になりますものね・・・。」
「そうだな。」
　弟子と客のほのぼのとした会話に憮然としながら、ロン・ベルクは、ヒュンケルに言葉を返した。
「爪など、なにを使っても切れるだろう。」
　だが、ロン・ベルクの言葉を、ヒュンケルは否定した。
「そうでもない。
　俺は不器用だからな。
　いまは、徐々に俺が二人の面倒を見るようにしているんだが、この前、子どもの爪を切ってな。
　そのときに、俺が力任せに子どもの爪を切ってしまい、指先に傷をつけてしまったんだ。」
　ヒュンケルは、心底落ち込んだような神妙な顔で、言葉をつづけた。
「マァムは気にしなくていいと言ってくれたんだが、どうにも俺が許せなくてな。
　それで、貴方のことを思い出した。
　魔界の名工と謳われた貴方の作った爪切りなら、俺でも子どもの爪がうまく切れると思ったんだ。」
　かつて、ロン・ベルクの作った名作である「鎧の魔剣」と「鎧の魔槍」。その２つを使いこなした男からの称賛の言葉に、ロン・ベルクは悪い気はしなかった。
　ヒュンケルは言葉をつづけた。
「幸い、貴方の腕も癒えてきて、最近では、ノヴァの助けを得ながらでも鍛冶を打っていると聞き、それならば頼めるかと思った。
　引き受けてはくれないだろうか。」

そう言って、ヒュンケルは頭を下げた。
　たかだか、爪切りひとつ。
　それにここまで礼を尽くすこの男の心境が、ロン・ベルクには理解しかねたが、とにかく、ヒュンケルが真剣なことはよくわかった。
　悪い気はしない。
　ロン・ベルクはやれやれという様子で大きくため息を吐くと、言葉を返した。
「・・・仕方ない。」
　その言葉に、ヒュンケルは顔を上げた。
「有難い。」
　その面には、笑みがあった。
　ふたりの様子を間近で見ていたノヴァは、ヒュンケルのグラスにカルヴァドスを注ぎながら、そっとささやいた。
「・・・上手いですね、ヒュンケルさん。」
「？何がだ？」
　ヒュンケルとしては、ただ思ったことを口にしただけの様子であったが、それがこの気難しい魔族の鍛冶屋を動かした。
　その言葉の効果に気付かず、ヒュンケルは不思議そうにノヴァを見返した。
　ノヴァは苦笑した。
「いいえ、なんでもありません。
　よかったですね。」
「ああ。」
　うなずくと、ヒュンケルは穏やかに微笑んだ。

　ロン・ベルクが鍛冶小屋で、小槌の手入れをしていると、ドアが開く音がした。
　彼がリビングに戻ると、ちょうどノヴァが入ってきたところだった。
「戻りました、先生。届けてきましたよ。」
「どうだった。」
「ヒュンケルさん、喜んでましたよ。

マァムさんはびっくりしてました。先生が本当に作ってくれたんだってわかって、とても喜んでくれて、お礼を言っていましたよ。
　お子さんたちにも会ってきました。かわいかったですよ。」
「そうか。」
「マァムさんからハーブティもいただいてきました。今お茶を淹れますね。」
「酒がいい。」
「駄目です。
　まだ明るいんですから。
　この時間はお茶にしてください。」
「お前もうるさい奴だ。」
「そんなことはわかりきっているでしょう。」
　最近は、ロン・ベルクの不満や文句も、ノヴァはものともしない。
　ロン・ベルクは、諦めて、弟子の淹れてくれる茶を待つことにした。
　少し待つと、ノヴァが、湯気の立ち上るカップを２つ持って戻ってきた。
　互いの前に１つずつカップを出し、ノヴァも椅子に腰を下ろした。
　合わせて持ってきた小皿の上には、干しブドウが乗っていた。
「先生は甘いものはあまり召し上がりませんけど、このくらいなら、ってマァムさんから。おつまみにもなりますからね。」
「ああ。」
　簡単なお茶請けをはさんだ、即席のティータイムだった。
　お茶の入ったカップを前に、ロン・ベルクは、ヒュンケルの顔を思い浮かべながら、ため息を吐いた。
「まったく・・・おかしな依頼だったな。」
「そうですか？」
　ロン・ベルクは、複雑そうな顔をしたまま、うなずいた。
「もっとも、近頃は武器を依頼しに来る客も減った。
　平和になった、というせいかもしれんが。
　ノヴァ。

お前の時代には、武器職人としては食っていけないかもしれないな。」
「武器が必要とされない世の中になるのでしたら、それに越したことはないですけどね。」
　ノヴァはあっさりと答えた。
　ロン・ベルクは、鋭い眼差しを弟子に向けると、彼を問いただした。
「ノヴァ、お前、ナイフや包丁を、リンガイアやランカークスに売りに行っているな？」
「あ、御存じでしたか？」
　あっさりとノヴァは肯定した。
　ロン・ベルクは、うなずいた。
「当たり前だ。
　お前が武器だけじゃない、そういった道具を打っているのはわかっていた。」
「だって、二人分の生活費を稼がないといけませんから。」
「まあな・・・。」
　ノヴァがもともと何のために、そういった道具を鋳造し、売りに行っているのかは、ロン・ベルクもわかっていた。
　しかし、ノヴァは、武器職人になろうとしていたはずだ。
　ロン・ベルクはノヴァに問いかけた。
「だが、お前はそれでいいのか？
　お前はナイフや包丁を作りたかったわけじゃないだろう。」
「そうですね。」
　ノヴァは曖昧に答えた。
　そして、少し困ったように眉根を寄せ、沈黙をした。ロン・ベルクもそれ以上、問い質さず、沈黙を維持した。
　やがて、ノヴァはゆっくりと言葉を紡ぎ始めた。
「先生。
　僕は思うんです。
　確かに今は、武器を注文するお客さんは減っています。
　でもなくなってはいない。
　僕は、武器が必要のない世の中になるのならそれに越したことは

ないと思います。
　でも、どんな世の中になっても、武器は絶対に必要なのだと思います。」
　ノヴァの持つ若者らしい理想と、ある種の諦念かそこにはあった。
　若いながらも、ノヴァは、激戦を潜り抜けてきた男だ。その中でしか得られなかった経験や思考が彼にはあった。
　ノヴァは言葉をつづけた。
「僕は、あの戦いの中で、自分の尊厳と、大切な人たちの命を守るために、剣をふるいました。
　剣がなければ、それはできませんでした。
　先生。
　どんな時代になっても、自分の尊厳と大切な人の命を守るために、武器は必要です。」
　それは、蹂躙された祖国の光景を目の当たりにした彼からすれば、決して望むことではないだろう。だが、ノヴァは、はっきりとそう言い切ると、言葉をつづけた。
「でも、先生、包丁やナイフ、それに爪切り・・・こういったものは、『生きるための道具』です。
　先生は、もともと武器を作るための技術を使って、ヒュンケルさんのために爪切りを作った。
　僕も同じです。
　貴方から教えられた技術をもとに、ナイフや包丁を作って、それを売りに行っています。そして僕の作った道具で、生活をしている人がいる。
　それが、僕には嬉しいんです。」
　そう言って、ノヴァは笑みを浮かべた。
　若者らしい、爽やかな微笑みだった。
「先生、貴方の技術は、武器を作るものですが、それだけじゃない。
　そして、実際に貴方も、武器を作るためだけにその技術を用いているわけでもない。
　武器も、生きるための道具も、どちらも必要なものです。

そのどちらも、貴方はもたらすことができる。
そんな貴方を、僕は、誇りに思います。」
ノヴァのまっすぐな視線を受け止めきれず、ロン・ベルクは視線を逸らした。そして、照れているのか、口をとがらせてぼやいた。
「・・・褒めてもなにも出んぞ。」
すると、ノヴァは、口調を変えて、両手を叩いた。たったいま、思い出したかのような声色だった。
「あ、そうです。忘れてました。
マァムさんから、ロモスのワインもいただいてきているんです。先生にって。」
ロン・ベルクは、ノヴァに向き直って身を乗り出した。
「何だと。
おい、ノヴァ、何でそれを早く言わない。」
「さっきも言いましたけど、明るいうちは、お酒はダメです。」
ロン・ベルクの酒量は、台所を預かるノヴァにしっかりとコントロールされていた。
「ちゃんと、今晩、開けますよ。
ワインのあてに、鴨のローストもいただいてきたんです。
先生には薄味だろうからって、味を付け直してくれって言われましたけどね。
白カビのチーズをつけますよ。
たぶん、それでちょうどいいと思います。」
そう言ってノヴァは立ち上がると、飲み終わったカップを片付け始めた。
台所にいったん引き上げると、ノヴァは、台所からひょっこりと顔を出して、師に呼びかけた。
「あ、先生、包丁研いでおいてくれませんか？」
「自分でやれ！」
「はーい。」
そう言いながら、台所で、今夜の夕食を作り始めるノヴァの姿があった。
弟子の姿を眺めながら、ロン・ベルクは、先ほどの場の語った言葉をもう一度思い返した。

「・・・生きるための道具、か。」
　それは、繊細なようで、しなやかな強さを持つノヴァらしい表現だった。
　この若い弟子は、既に自分を追い越しているところがあるかもしれないなと、ロン・ベルクは、口に出さずに思った。